

平成 26 年度 熊本県農協青壮年部海外視察研修に参加して

JA たまな青壮年部 前本 勝

平成 26 年 7 月 21 日から 7 月 28 日までの 8 日間 オランダ・フランスで農業視察を行ってまいりました。

福岡空港を出発し、12 時間 オランダ スキポール空港へ到着後アムステルダムのホテルへ移動しました。

2 日目 (7/22) 視察研修開始です。

まず、世界最大の花市場 アールスメア生花中央市場を視察しました。毎日、オランダの人口と同じ数の 1630 万本の生花のセリが行われていた。検査体制も充実しており、品種、花の色などにより、抜き打ちで 日持ち、葉のしおれ等の検査が行なわれ、統一された基準でセリが行われていた。近年はセリのソフトを購入する業者が増加してきた、各事務所でセリに参加できるので市場内に 5ヶ所あったセリ場も現在は 2ヶ所となっていた。



次に有機栽培・バラ育成農家の視察です。

北海に面した海拔△6mの地帯で 2006 年に 6 h a で栽培を開始。現在 13 h a に規模拡大 7 名の従業員と 80 名のパートで賄っておられた。

フローラフォーレンという組織に属しており、会員は 5000 名で主な輸出先はヨーロッパ全体はもちろんイギリス、アメリカ、日本、中国等に輸出されていたWKKという装置でガスを用いて発電し、温水による暖房。発生したCO₂は近くのトマト農家に販売されて

いました。

バラ用のCO₂は近くのシェルが精油する時にできるクリーンなCO₂を購入されており、3~4年後は地下温水に切り替えていき 2.5km採掘で70~80℃ 7km採掘で150℃の温水が出てくると話されました。



次にトマトワールドです。

2009年に6人の生産者で設立、現在は財団法人となっております。

市場流通はしておらず、トマト園芸施設のプロモーションを行っておられ、見る、匂い、触る、味わいを体験できる施設でした。

多くの農業関連の企業が共催し 経済的、人材支援を行っており日本の企業はサカタのタネが共催しておられた。

ここでは80種類のトマトを栽培し、顧客の嗜好から品種を選んでいく作業が行なわれていた。

この地の生産者も規模拡大したい方も多いが 土地が少なく 規模拡大する為に栽培条件の少し悪い 北のアムステルダム もしくはスペイン、ポルトガルで生産する生産者もおられるそうでした。



3日目 (7/23) デ・マルケ (乳牛飼育のための研究)

ワーヘニング大学の研究室で大学、大学院 研究所等の組織の一部で経済省、国土省、EU、消費者等から活動資金を得て研究されていました。

近年の研究内容は牛の排泄物による地下水の汚染等が問題となっており、同研究室では牛にあたえるエサを少なくし、排泄物を少なくしながら、いかに乳量を減らさないか研究されていた。

バイオガスの実験もされており、牛の排泄物でメタンガスを発生させ、そのガスで発電。排泄物の残りは化学肥料を作り、かたまりは建築資材にリサイクルされていました。



次にバイオガス施設です。

ミクロフェルメというオランダで最初の機械で牛の排泄物を用いてバイオガスを発生させ電気を作っておられました。この農家では牛の 600 頭の牛を飼育されており、その排泄物をサイロに入れて 40℃の熱を加えてガスを発生させる。

その時発生した熱は子牛の室内の暖房・ミルクを暖めるために使用され 発生したガスで電気を発生させ 牛舎の電気をまかなっておられた。余剰電力は売電されていました。

この発電装置のメーカーはホスト (HOST) という会社で家畜の排泄物だけではなく、木のチップ、家庭ゴミ、汚泥等からガスを作る会社で と殺場での残骸等からもガスを作るとの事でした。

4日目 (7/24) ロイヤル・ファン・ザンテン社

1862 年設立 世界で一番古い球根の会社で現在は球根以外にもアウストロメニア、ペゴニア等も販売されていました。

球根は契約農家で生産し、他にもニュージーランドでも生産されていました。

販売先として日本、中国、インド、アメリカ等に販売されており、日本には年間でユリで9千万球、チューリップで1億5千2百万球が輸出されていました。

球根では生産者がいつの時期に開花させたいかで温度処理を行い生産者の望む形で出荷されるとの事でした。

出荷後も日本の生産者宅に訪問して現地確認を行われるそうでした。

ロイヤル・ファン・ザンテン社とオニニング社の2社で日本の60~70%のシェアを持っておられ、2社の違いはオニニング社は業者から購入し輸出 ロイヤル・ファン・ザンテン社は生産し輸出されていました。



次にバラ農家（マテイン氏）

視察日程にはありませんでしたが現地ガイドのおすすめで空港近郊で小規模で成功された若手農業者でした。

60aの施設で25種のバラを栽培し、オランダでは小規模であるが この地区は富裕層が住む地区で地の利を活かし20年前に直売所を設置し、直売所での販売はもとより ブーケ等のフラワーアレンジを行い人気になり口コミで広がって成功したそうです。

生産現場では、冬場に暖房等の生産コストが高くなるので、試験的に冬場の2~3カ月は生産をストップし、コストをかけずに生産をする方向に向かうとの事でした。

今後も「良いものを作って売る」がモットーで 規模拡大ではなく顧客のニーズにあった品種を選定し栽培していくそうです。

スキポール空港からシャルル・ド・ゴール空港へ

5日目（7/25）パリ近郊実験農場（国立牧羊場）

200年の歴史があり、ルイ16世の時代に羊を300~400頭飼育
領地は元々お城の跡地で800haの土地で国の所有地
実験農場も国の管理下にあるが、資金等の提供はないとの事でした。
現在は羊のメリノス種の原種の保存、地域の学校、パリ市内の家庭向けに
教育農場、馬関係、人工授精の学校として200名の生徒が在籍されており それらの収益
で農場の運営をされてました。



6日目(7/26) 本場のマルシェ (プレジダンウィルソン)

他にも4日目にパリ市内のスーパー視察 (オーシャン)

5日目 " (カンフル) を視察しました。

スーパーは日本でいうイオンモール等の中にあるスーパーと同じで複合施設の一角にあり
日本のスーパーと変わりなく品揃えも豊富でした。

価格は高めで ミニトマトで100g 80~100円。

トマトは 1Kg 420円程で販売されていました。

ローカル (地元)、オーガニック (有機) のコーナーもあり人気がありました。

マルシェでは価格が安く設定されていると思っていましたが、スーパーより価格は同等か
高めでしたが、スーパーと比べると新鮮な品物が多く人気でした。

比較的、富裕層が住む地区だったので、価格が高くても 新鮮さで人気があるように思え
ました。

視察日程で、4日半でハードスケジュールの中、とても内容の濃い視察研修でした。

オランダは世界第二位の食料輸出国であり、日本にできない事はないと思い 今回の海外
視察に参加しました。

しかし、オランダの国土の狭さはあるものの 広大なユーラシア大陸の一部であり隣国とは陸続き 熊本から関東、関西に出荷している我々の農産物もオランダからすれば輸出になるし、その環境の違いをあらためて感じる事が出来ました。

栽培品目の選択と集中は研究開発、施設建設、栽培、輸送そして販売に至るまでのバリューチェーンのすべてにおいてコスト低減効果を生んでいる。

このような事は真似することは難しいと思うが、栽培技術は十分に参考できると思います。また、近い将来、専門的に視察に訪れたいと思っています。

今回、オランダ、パリ農業視察を通して実際現場に立ち、肌で感じ 見聞を広めた経験を礎に、今後地域農業の発展に貢献できたらと思います。

最後になりますが、多くの関係機関からのご支援を受け、大変貴重な経験をする事ができました。誠に有難うございました。



帰国後、私が経験し感じたことを多くの盟友に共有してほしく、発表の場を設けて頂きました。

まず、JA たまな青壮年部の学習会（参加者 80 名）の時、時間を頂きオランダ・パリの農業の現状、考え方などを発表させていただきました。

また、11月に行われました熊本県農協青壮年部協議会の熊本県大会（参加者 300 名）においても発表させていただきました。

限られた国土での農業は環境に配慮した自然循環農法でありながらも全てがコンピューター管理で、近い将来、ガスや電気も使わない農法を目指しているとの説明が印象的であった。

日本の一つ先を行く環境に配慮した取り組みを行っておられ、自然と共生しながら持続的農業の方向を探っているように感じた。

EU 全体が環境型農業に取り組んでおられ、農畜産物の生産において最先端技術を駆使しながら取り組まれているものの、スーパー等の品物を見る限りでは日本と比較した場合、品質、食味とも日本産が優れていると感じた。

今後、日本においても流通の仕組と環境に配慮した持続的な農畜産経営及び栽培技術が課題となると感じました。